ボランティア体験が学生にもたらす教育効果（Ⅱ）

北川かほる・三瓶まり・福井典子*・南前恵子
前田隆子・笠置綱清

Kahoru KITAGAWA, Mari SAMPEI, Michiko FUKUI,
Keiko MINAMIMAE, Takako MAEDA and Tsunakiyo KASAGI

Educational effectiveness of students working as volunteers with children（Ⅱ）

現在社会は物質的に豊かになり、生活水準を向上させた。その一方で、少子化や核家族化、受験競争の過熱などの社会現象を起こした。これらの社会現象などより、子どもの社会性が育ちにくいといった、様々な悪影響が生じているのではないかという指摘がある[1)]。

さて、看護学術用語には「看護婦と患者の関係」について、「看護婦と患者との間の相互作用の過程であり、看護過程の成立基盤である」と記述[2)]されている。このことは、看護職者を目指す学生は看護の対象となる人との関わりができ、さらに、関わった人と自分の相互作用を理解できる技術を習得する必要ある。

しかし、講義だけでは看護の対象となる人の生活を理解することは難しく、臨床実習においても、子どもや高齢者と関わることができない学生が目立つようになってきた。

このような社会状況の中にあって、現在の青少年の人格形成などを目的としたボランティア体験学習が、高校や大学などで取り組まれるようになってきている。そして、本校においても平成12年度新入生を受け入れる保健学科には、1年次にボランティア体験学習がカリキュラムに組み込まれている。

そこで、ボランティア体験が看護をめざす学生にとって、どのような教育効果をもたらすかを明らかにすることを目的とし、大山家族（糖尿病の子どもを対象としたサマーキャンプ）に参加した学生にボランティア体験についての聞き取り調査を行った。

対象および方法

対象は、平成11年8月の大山家族のサマーキャンプにボランティアとして参加した鳥取大学医療技術短期大学部の学生で、調査に同意が得られた者18名である。

調査方法は、面接による聞き取り調査とした。質問内容は、大山家族の参加回数、参加動機、参加後の感想、子どもとの関係などであった。面接の記録から、学生はボランティア体験の過程を通し、どのように発達をしたかに視点を当て、教育効果を検討した。その調査期間は10月～11月であった。

結　　果

面接による聞き取り調査から、ボランティア体験の背景、参加後の感想、子どもとの関係などについてまとめた（表１）。

１．ボランティア体験について

１）入学前のボランティア体験

ボランティア体験に関しては、6割の学生が入学までに、特別養護老人ホームや老人保健施設、障害者施設など、福祉関係施設において何らかの体験をしていたが、4割の学生は未体験だった。しかし、体験の有無により、大山家族のボランティア体験後の感想や子どもとの関係などに大きな違いはみられなかった。

２）大山家族への参加動機

また、大山家族への参加動機が、「高校時代に知り、参加したいと思っていた」「入学前より興味があった」「看護婦になるには必要と思った」「自分が世話になったので、今度は人の役に立ちたい」など明確な学生は６名であった。その他12名は「何かしてみたかった」「子どもに関心があった。子どもが好き」「軽い気持ち」などで、サークルの学生の誘いなどが切っ掛けとなり参加していた。

看護学科、*鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設

表1　ボランティア体験

	学生	回数	ボランティア経験歴	参加動機	参加後の感想	子どもとの関係
1	1年女子	1	なし	中学より興味があった。	子どもが前向きで励まされた。糖尿病の勉強になった。いろんな人と接したい。	自分のイメージと全く違って戸惑ったが、次第に馴れた。
2	1年女子	1	障害者センター掃除(中学)	以前より興味があった。	自分も心疾患あるので、前向きで励まされた。対人関係が難しかった。いろいろな人と接したい。	自分から声を掛けないといけないので辛かった。
3	1年男子	1	なし	軽い気持ち。	子どもが馴れてくれるか心配だった。良かったけれど疲れた。	いろいろな子がいて、対応が大変だった。
4	1年女子	1	中～高で数回：地域の清掃活動	自分が世話になったので、今度は人の役に立ちたい。	苦しいこともあったが、自分が成長したと感じることができた。	泣いて大変だったが、別れる際「迷惑をかけてごめんなさい」と言ってくれ、分かってくれたと感じた。
5	1年女子	1	2～3回	子どもが好き、少しでも辛さが分かればよい。	心身共に疲れたが良かった、相手の気持ちを分かるようになりたい。	楽しんでいる子どもの笑顔を見て楽しかった。心を閉ざしている子は難しい。
6	1年女子	1	なし	子どもと接することができる。楽しそう。	普通の子ども、担当の子はしっかりしていて生活に前向きですごい。	楽しかった。
7	1年女子	1	多数：特別養護老人ホーム	子どもと接したかった。	普通の子とほとんどかわらず、元気で病気だと思わなかった。	楽しかったが、悪いことをしている子に強く叱れなかった。
8	1年女子	1	なし	高校時代に知り、参加したいと思っていた。	人間関係等、学ぶことが多く良かった。	楽しかった。子どもなりの考え方に接して新鮮だった。
9	1年女子	1	1回：障害者施設	子どもが好きなので、子どもと接したい。	充実して楽しかった、子どもを叱ることができなかった。自分から積極的にかかわりを持つようにしたい。	叱った後のフォローが難しい。気持ちを読み取るのが難しい。
10	1年女子	1	なし	子どもが好きなので、子どもと接するサークルに入りたかった。	勉強になった。栄養士さん等他の人の仕事がよくわかった。	あまり心を開いてくれなかったが、他のメンバーの強力でうまくいった。文通している。
11	1年女子	1	高校時代に阪神大震災後の仮設住宅での世話	何かしたかった、人と接するのは苦手だがチャレンジの意味もある。	いろいろ反省がいっぱいある。子どもの状態が把握できなかった。	子どものわがままへの対応に悩む。子どもに振り回されていた。最後にはお互い分かり合えた。
12	2年女子	2	高校時代に障害者施設や老人保健施設など	何かを経験してみたかった。	担当の子どもとのかかわりが難しくて悩んだ。自分として成長できた。	大変だった。担当以外の子どもとは仲良くできた。子どもは正直なので一度嫌われると大変である。
13	2年女子	2	なし	子どもに関心あるが接っし方がわからない。看護婦になるのには必要と思った。	昨年は担当の子どもがいてもっと楽しかった。子どもの苦手意識は無くなった。	学校でかくしている子も多くどうして現実の厳しさを乗り越える力をつけるか難しい。充分なカウンセリングができなかったと思うこともある。
14	2年女子	2	高校時代に障害児と遊ぶ	高校時代に障害児と遊んだ時の課題。	有効な助言ができたか疑問に思う。	昨年は小4の子で、うまく関係が築けなかった。今年は馴れて積極的になれた。
15	3年女子	2	なし	何かボランティア活動をやってみたかった。	参加者全員で全ての行事をやり遂げ満足である。もっと新人さんのフォローができればよかった。	担当の子とは心を開いて話せて楽しかったが、男の子との関係は難しかった。
16	3年女子	3	高校時代に福祉施設で	何かやりたいと思っていた。	参加者と親しくなれた。サークルとして楽しくやっている。	子どもと一緒になって遊んでいる。
17	3年女子	3	小学校4年の頃から保育園、特別養護老人ホームなど10回程度	人と接して楽しいことをしたかった。興味本位。	事前の活動にあまり参加できなかったことが心残りだ。	毎年、うまく接することができず泣いてしまうことがある。緊張する。
18	3年女子	3	高校時代に老人ホーム、ディサービスセンター	自分にできることがあれば、また、学びとして広がれば。	体力が大変であるが達成感がある。	子どもに接することができて楽しい。カウンセラーの役割は難しかった。

3）サマーキャンプにおける役割と感想

サマーキャンプでの役割は、初回参加者は必ず糖尿病の子どもの受け持ちとキャンプ運営の何らかの係を担当する。つまり、7泊8日という長期間に及び、糖尿病の子どもと寝食を共にした生活を過ごすのである。

このキャンプ参加後全体を通しての感想は、「心身共に疲れたが参加してよかった」「糖尿病や他の人の仕事が分かり勉強になった」「参加者と親しくなれた」「登山など企画したことが成功した」「参加者全員で全ての行事をやり遂げ満足だ」また、2回以上の参加者は、「初回参加者へ有効な助言やフォローができたか疑問に思う」などであった。

そして、来年の大山家族のキャンプへの参加について、1名は「気持ちとしては参加したいが、無理かもしれない」だったが、17名の学生は「参加したい」と回答している。

2．学生と子どもの関係

1）子どもの見方

参加前の子どもの見方は、病児として大山家族に参加経験のある1名を除き、「病気の子ども」や「暗いイメージ」を持っていた。しかし、参加後は「普通の子どもと変わらず、元気で病気だと思わなかった」「子どもは子どもなりに考えている」「子どもらしいところを持つ反面、将来への心構えを話す」「しっかりしている子がいてビックリした」「病気というレッテルを貼るのは間違っている」「病気で人生が制限されるものではない」などの見方に変わっていた。

2）子どもへの関わり方

子どもへの関わり方に関しては、「自分のイメージと全く違って戸惑ったが、馴れた」「自分は大人しい性格なので、自分から声を掛けないといけなかったので辛かった」「いろいろな子どもがいて、対応が大変だった」「子どもは正直なので、一度嫌われると大変だ」「悪いことをしている子を強く叱れなかった」「叱った後のフォローが難しい」また、2回以上の参加者は「昨年はうまく関係が築けなかったが、今年は慣れて積極的になれた」「カウンセラーの役割が難しかった」「子どもと一緒になって遊んでいる」などであった。

3）子どもとの相互作用の過程

ボランティアとしての学生と子どもとの相互作用の過程については、「楽しかった」「子どもなりの考えに接し新鮮だった」「子どもの状態が把握できなかった」「あまり心を開いてくれなかったが、他のメンバーの協力でうまくいった」「子どもの我がままに振り回されていたが、最後にお互いに分かり合えた」「食事の度に母親を思い出し、泣いて大変だった。しかし、別れる際『迷惑を掛けてごめんなさい』といってくれ、分かってくれたと感じた」「相手の気持ちが分かるようになりたい」「難しい関わりで悩んだが、自分としては成長できた」「苦手意識は無くなった」などであった。

考　　察

堀は、発達現象は教育作用の介在などを通してつくられていくものであり、教育的干渉作用の必要性について述べている[3)]。

そこで、大山家族のサマーキャンプに参加した学生は、ボランティアの体験過程を通して、看護職者として必要な発達課題である子どもの見方と関わり方、子どもとの相互作用の理解についてどの程度習得できたか、ボランティア体験の教育効果について考察を加えた。

1．役割の理解と責任感

参加動機について、大半の学生は糖尿病の子どもに関しての専門的知識ももたず、子どもとのふれあいを求め、大山家族というサークルに参加している。そして、心身共に疲れるが、参加してよかった点として、「学生が主体となって、全の行事の企画から考え、実施して行く」「参加者は各々の立場で支え合い責任を果たす」といっている。

つまり、参加した学生はサマーキャンプの過程を通して、各人の役割を理解し、自分の役割の実施に責任感を持つと共に、参加者全員で支えあうことの大切さを理解できるようになっていることが分かる。さらに、2回以上の参加者の役割の中には、1年生の相談係もあり、新人の参加者のフォローが十分できなかったことを反省しているものもいた。

以上のことから、大山家族におけるボランティア体験は、活動の中で自分の役割を理解し、責任感が持てるようになる教育効果があり、さらに、継続した活動により、その効果はより高いものとなっていると考える。

2．子どもの見方、関わり方

全国身体障害者スポーツ大会にボランティアとして

参加した看護学生の体験について、参加前の学生は障害者に対し、「弱い、かわいそう」「何かしてあげなくては」との見方から、参加後は「自分たちと同じ人間だ」「私にできることは何か」に変わったと報告している[4]。

大山家族に参加しボランティア体験をした学生も、参加前は糖尿病の子どもについての見方は、「病気の子ども」「暗いイメージ」であった。しかし、参加後は、「病気に不安を持っている子」「病気のことをよく理解している子」「かわいいが、憎らしいところもある子」「しっかりしている子」など、様々な子どもがおり、「普通の子どもと同じだ」と見方が変わっている。

そして、学生は子どもの見方が変わったことで、糖尿病の子どもに対し、病気のことを意識せず関われるようになっていた。また、子どもは一人ひとり個性を持った人間である。したがって、「悪いことをした時の叱り方」や「叱った後のフォロー仕方」について悩み、考えている。そして、子どもと関わるうえで大切なことは、個々の子どものニードを把握し、子どものニードを尊重したうえでの人間関係の形成であることが分かるようになっていた。

3．子どもと学生の相互作用

医療の場へ、学生ボランティアを送り出している岩田は、「ボランティア関係が両者の主体性を育てる」と述べている[5]。

学生は子どもについて、「可愛いだけではなく、憎らしいところもある。一人ひとり個性を持っており、その関わりは難しい」といっている。そして、7泊8日のキャンプ生活を通し、別れる際、子どもが「迷惑をかけてごめんなさい」といってくれ、分かってくれたと感じた。また、子どもに振り回されていたが、最後にお互い分かり合えたなど、7泊8日の日程の中では、いろいろな出来事があったが、最後には子どもと学生の間には信頼関係が形成されている。

つまり、学生も子どももお互いの関わり方を模索する。その過程では、子どもは自分の担当の学生の反応を見ながら、悪いことや憎らしいこともする。学生は悩み、考え、他の参加者のアドバイスも受けながら、子どもとの信頼関係を形成するために努力する。この子どもと学生が関わり合う相互作用の過程が、学生も子どもも発達させると考える。したがって、ボランティア関係は、裸と裸の人間が出会い、ぶつかり合い、心を開き触れ合う相互作用の過程であると考える。

これらのことから、大山家族におけるボランティア体験は、学生の①役割の理解と責任感、②子どもの見方、関わり方、③子どもと学生の相互作用の過程を発達させる教育効果があることが分かった。

要　　約

学生のボランティア体験がどのような教育効果をもたらすかについて、大山家族（糖尿病の子どものサマーキャンプ）にボランティアとして参加した、学生18名の聞き取り調査をした。調査記録から、ボランティア体験における学生の発達に視点をあて、教育効果を検討した。その結果、①自分の役割を理解し、達成しようとする責任感ができた、②糖尿病の子どもの理解が、病気の子どもから普通の子どもに変わり、普通の子どもとして関われるようになった、③個々の子どもへの関わりについて、悩み、考え、行動し、反省できるようになった、などの発達がみられた。この結果から、大山家族でのボランティア体験は、学生を発達させる教育効果があることが分かった。

本研究の趣旨に賛同しインタビューにご協力いただきました18名の医療技術短期大学部学生の皆様に感謝致します。

文　　献

1）厚生省編、厚生白書、平成5年版、p3、1993.
2）薄井担子、兼松百合子、林滋子、原萃子：看護学学術用語、p10、1995.
3）堀薫夫：教育の中のエイジングの問題、生涯学習Ⅶ成人性の発達、pp258-260、1989.
4）青木寿子、浅川明子、高野真由美、斎木由紀子、看護教育、40(4)、262-272、1999.
5）大阪府立母子保健総合医療センター：ぽらんてぃあAction、p47、1997.

Summary

This study examined hearings and daily reports of 18 students, who participated in volunteer work at Daisen family, a summer camp for diabetic children, to make sure what educational effects those students have on the children. As a results, there were some interesting developments:

(1)Students could improve their responsibility in understanding and achieving their job role.

(2)Diabetic children also felt healthier by having some relationship with the students.

(3)Students could worry, consider, act and reflect on their involvement with diabetic children individually.

After analyzing these results, it has been concluded that volunteer work is effective in improving student's education.